

連載

刀剣の歴史と思想

第9回

酒井 利信

天より降る剣 師霊剣

日本には古代二大靈剣といわれるものがある。

師霊剣と草薙剣である。

この二つの靈剣が主となり、日本刀剣思想を根底から突き動かすこととなる、神話的イメージを形作っていく。

古代日本において、当時、羨望の眼差しで見られていたこの二つの靈剣が、記紀神話の冒頭で整えられた神話世界で生き活きと躍動する。

まずは、剣神タケミカヅチと一心同体ともいえる師霊剣の活躍を見ることから始めたい。

▼天より降る剣神タケミカ ヅチー国譲り神話ー

師霊剣を語るには、まず国譲り神話から話をはじめなくてはならない。

ここでは既に述べたように、天上界である高天原と下界である葦原中国とからなる神話世界が前提となっている。

高天原を統治するのは、天上界の最高神である天照大神である。天照は、天上界

のみならず下界である葦原中国をも自らの子孫に統治させようとする。しかし葦原中国は、荒ぶる神が大勢いる騒がしいところで、大国主（オホウケノミ）という国つ神が統治するところである。まずはこれを平定しなくてはならない。そこで天照は、高御産巢日神（別名、高木の神）らと相談をして、アメノホヒにつづいてアメノワカヒコといった使者を二度も遣わすのであるが、アメノホヒは大国主に媚びて帰らず、アメノワカヒ



刀剣の歴史と思想

天より降る剣 師霊剣

鹿島神宮の祭神

香取神宮の祭神

コは大国主の娘を娶り自らがこの国を奪おうと謀るなど、派遣はことごとく失敗におわる。そして三度目に遣わされた使者が、火神の神話で誕生した剣神タケミカヅチである。

タケミカヅチは、『古事記』によればアメノトリフネを従えて、『日本書紀』によればフツヌシと共に、大国主にこの国の統治権を譲るよう交渉しに下界へ降りていく。いわゆる国譲り神話である。

以下、『古事記』の記述をあげて詳細を見ていきたい。

是を以ちて此の二はしらの神、出雲国の伊那佐の小浜に降り到りて、十掬剣を抜きて、逆に浪の穂に刺し立て、其の剣の前に踏み坐して、其の大国主神に問ひて言りたまひしく、「天照大御神、高木神の命以ちて、問ひに使はせり。汝が宇志波邰流葦原中国は、我が御子の知らず国ぞと言依さし賜ひき。故、汝が心は奈何に」とのりたまひき。

天照の命で天上から下界へ向かったタケ

ミカヅチは、出雲の国の伊那佐の小浜に降り立ち、もつていた十掬剣を抜き放つて切先を上に向け、波の穂がしらに柄を下にして突き刺した。この「十掬剣」とは、『古事記』で他に「十拳剣」と記されているものと同様と考えて良い。既に述べたが、『日本書紀』では「十握剣」と表記されているもので、握り拳十個分もある長大なものであり、当時としては実に見事で立派な剣のことである。タケミカヅチは、この剣の切先の上に胡座をかいて座る。実に衝撃

的な登場の仕方であるが、剣の上に胡座をかくという描写は、神の憑代としての剣の神聖性を表している、あるいはタケミカヅチが剣と一心同体であることを表現していると理解できる。いずれにせよ非常にマジカルな描写である。そしてタケミカヅチは、次のように言う。「天上界の天照

大神と高木神の仰せによって遣わされた者である。大神は、お前が領有している葦原中国は、我が御子が統治するべき国であると言われているが、お前の意思はどうか」と。大国主に、葦原中国の統治権を譲る意思があるかどうかを迫る描写である。

これに対して大国主は、自分の跡を継いだ我が子であるコトシロヌシに聞いてほしいと答える。タケミカヅチはアメノトリフネを遣わしてコトシロヌシを呼び寄せ、改めて尋ねたところ、あつさりと「恐し



切先に座すタケミカヅチが描かれた絵（鹿島神宮蔵）



此の国は、天つ神の御子に立奉らむ」「恐れ多いことです。この国は天つ神の御子に奉りましよう」と言つて、自らは天の逆手という呪術により身を隠してしまつた。

ここまでで平穩に国譲りが承諾されたかという、この話には実はもう一波乱ある。大国主が言うには、もう一人タケミナカタという息子がいるという。以下、『古事記』の記述である。

其の建御名方神、千引の石を手末に撃つて来て、「誰ぞ我が国に来て、忍び忍びに如此物言ふ。然らば力競べ為む。故、我先に其の御手を取らむ」と言ひき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦剣刃に取り成しつ。故爾に懼りて退き居りき。爾に其の建御名方神の手を取らむと乞ひ歸して取りたまへば、若輩を取るが如、搥み批ぎて投げ離ちたまへば、即ち逃げ去にき。

そのタケミナカタが、千人がかりで引くほどの大岩を手先に軽々とさしあげてやつて来て、「誰が私の国にきてこそこそと話を

をしているのか。わたしと力くらべをしな
いか。受けるならば私が先にあなたの手を
掴もう」といい、タケミカツチの手を掴ん
だ。この時、タケミカツチは自らの手を立
氷（氷柱）に変え、またすぐに剣の刃に変
えた。立氷は剣の刃の透明で深い輝きを表
現したものか、この描写はタケミカツチが
剣神であることを強烈に主張している。そ
して懼れて退いたタケミナカタの手を掴ん
で、まるでやわらかい若輩を掴むようにし
て投げてしまつた。これには堪らずタケミ
ナカタは逃げて行つた、という内容である。

この後、タケミカツチは、科野の国（信濃国）の州羽（諏訪）の湖までタケミナカタを追い詰める。そこでタケミナカタは、ついに「此の葦原中国は、天つ神の御子の命の隨に献らむ」（この葦原中国は、天つ神の御子に献上しましょう）と言う。

息子たちの意思をうけて、大国主はどう
とう国譲りを承諾する。

そして、次のような記述で締めくくられ
る。

故、建御雷神、返り参上りて、葦原中国

を言向け和平しつる状を、復奏したま
ひき。

最後にタケミカツチは天上界に昇り返つ
て、天照大神らに葦原中国を平定したこと
を報告した。

以上がいわゆる国譲り神話であり、天照
大神の子孫である天孫が下界を統治するた
めに降臨していく、いわゆる天孫降臨の前
段として、必要かつ重要な神話である。

この神話では、天上と地上、天つ神（高
天原の神）と国つ神（天孫降臨以前から葦
原中国に土着していた神）という対立した
相が設定され、これを繋ぐ役を担つてタケ
ミカツチという神が活躍する内容である。
ここでは、このタケミカツチが剣神である
ということが強烈にアピールされている。
このことは、降臨してくるなり剣の切先に
座るといふセンセーショナルな登場の仕方
や、タケミナカタとの争いにおいて手が剣
に変じたことなどに窺われる。ここでの
タケミカツチは、どちらかというと剣と一
心同体である。この神と霊剣が別々に活躍
するということはない。

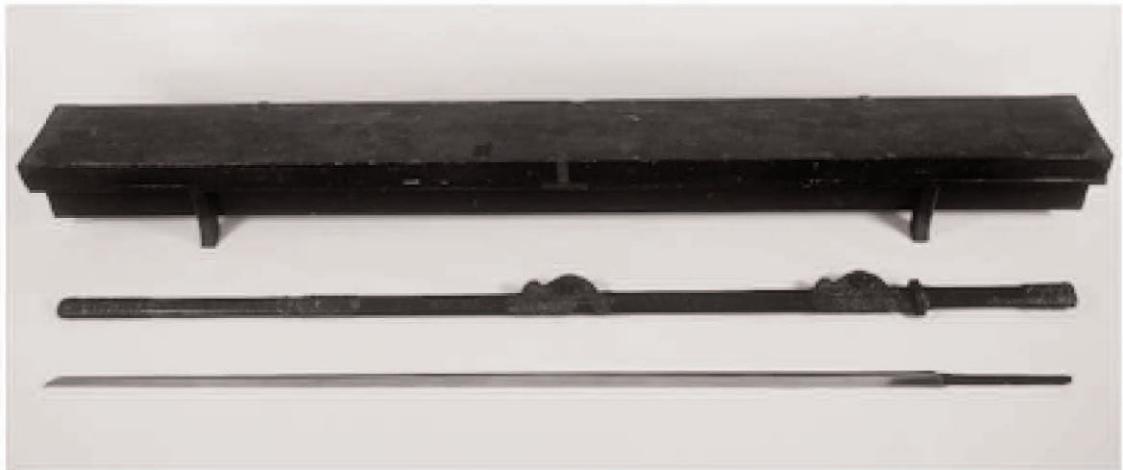
タケミカツチと剣
一心同体

対立相（天上と地上、天つ神と国つ神）
を繋ぐタケミカツチ



刀剣の歴史と思想

天より降る剣 師霊剣



「直刀（師霊剣）」・国宝（鹿島神宮蔵）

ここでの主役はあくまでも剣神タケミカヅチであり、本稿の中心となるべき師霊剣はその名前さえ出てこないが、この後、師霊剣が神話の中で活躍するためにはこの国譲り神話が前提として非常に重要となる。師霊剣が、神話の中で重要な役を担って登場するのは、神武東征神話を待たなくてはならない。

▼天より降る霊剣、師霊

〜神武東征神話〜

神武東征神話とは、初代天皇といわれるカムヤマトイハレビコ（神武）が日向を出発して東へ東へと国土を平定し、大和国の橿原宮で即位するまでの伝承を描いたものである。

先述の国譲り神話とは無関係ではなく、国譲り神話によって平定された下界である葦原中国に天照大神の子孫である天孫が降臨し、この天孫と血統上のつながりを持つものが代々天皇である、と神話上はされている。その系列にある初代天皇が、カムヤマトイハレビコ（神武）ということであ

る。^②

以下、神武東征神話の内容を見ていきたいと思います。神武はこの東征の最中、さまざまな困難に遭遇するが、熊野に到った際、最大の窮地を迎える。『古事記』の記述をベースに見ていきたい。

故、神倭伊波礼毘古命、其地より廻り幸でまして、熊野村に到りましし時、大熊髪かに出で入りて即ち失せき。爾に神倭伊波礼毘古命、倏忽かに遠延為し、及御軍も皆遠延て伏しき。

カムヤマトイハレビコ（神武）が熊野に着いたときに、大きな熊がふと現れたかと思うとすぐに姿を消した。すると神武は、たちまち正気を失い倒れてしまう。彼の軍隊もみな倒れてしまった。大熊とは荒ぶる神の化身であり、この毒氣に当たって倒れたのである。国土統一も成就しないかという、絶体絶命の窮地である。

しかし神武は不思議な霊剣の霊威によって、この窮地から逃れることとなる。



此の時熊野の高倉下、一ふりの横刀を賣ちて、天つ神の御子の伏したまへる地に到りて献りし時、天つ神の御子、即ち寤め起きて、「長く寝つるかも」と詔りたまひき。故、其の横刀を受け取りたまひし時、其の熊野の山の荒ぶる神、自ら皆切り仆さえき。爾に其の惑え伏せる御軍、悉に寤め起きき。

この時、高倉下という人が一振りの横刀③を持ってきて神武に献上したところ、

不思議なことにこの天つ神の御子は「長く寝てしまったことだ」と言って起き上がった。この刀剣を受け取った時、熊野の荒ぶる神は自然と斬り倒されていたという。そして神武の軍隊もみな正気を取り戻し起き上がった。

実に不思議な力をもつ刀剣であるが、この剣の正体を説明する記述が続く。

故、天つ神の御子、其の横刀を獲し所由を問ひたまへば、高倉下答へ曰ししく、



タケミカヅチの木像（鹿島神宮蔵）

「己が夢に、天照大神、高木神、二柱の神の命以ちて、建御雷神を召びて詔りたまひけらく、『葦原中国は伊多玖佐夜芸帝阿理那理。我が御子等不平み坐す良志。其の葦原中国は、専ら汝が言向けし国なり。故、汝建御雷神降るべし』とのりたまひき。爾に答へ曰ししく、『僕は降ら

ずとも、専ら其の国を平けし横刀有れば、是の刀を降すべし。此の刀を降さむ状は、高倉下の倉の頂を穿ちて、其れより墮し入れむ。故、阿佐米余玖汝取り持ちて、天つ神の御子に献れ』とまをしたまひき。故、夢の教の如に、旦に己が倉を見れば、信に横刀有りき。故、是の横刀を以ちて献りしにこそ」とまをしき。

神武が、この刀剣を得た経緯を聞いたところ、高倉下が答えて言うには次のような内容である。夢の中で、天照大神と高木の神がタケミカヅチを呼んで言うには、「葦原中国がひどく騒がしいようだ。私の御子たちも苦しんでいるらしい。この葦原中国はそもそもそなたが平定した国であるから、タケミカヅチよ降りて行け」と。天照からタケミカヅチに、下界の神武を救うようにという命令である。しかしタケミカヅチが答えて言うには、「私が降らなくても、その国を平定した刀剣がありますから、これを降しましょう。この刀剣を降す方法は、高倉下という人の倉の屋根に穴を開け、そこから落とし入れるのがいいでしょう」と。



- 神武天皇即位BC.660の謎
- 弥生の神（稲作と金属器を持った大陸の神）と縄文の神

刀剣の歴史と思想

天より降る剣 劔靈劔

そして高倉下に、「朝目が覚めたらお前がその刀剣をもって天つ神の御子である神武に献上せよ」と告げた。ここまでは夢の中の話である。そして夢の教えの通りに翌朝倉を見ると、本当に刀剣があったので、これを献上したというのである。

この刀剣について『古事記』には「此の刀の名は、佐士布都神と云ひ、亦の名は甕布都神と云ひ、亦の名は布都御魂と云ふ」と注記されており、『日本書紀』には「号を劔靈と曰ふ」と記されている。この劔が一般にいわれている劔靈劔である。

ここにきて初めて、国譲り神話において

葦原中国を平定すべく、タケミカヅチが先に胡座をかい座ったあの刀剣が、劔靈劔と結びつくこととなる。

国譲り神話において一心同体であったタケミカヅチと劔が、ここでは完全に分離して劔靈劔が主役として活躍しているところに一つの特徴がある。

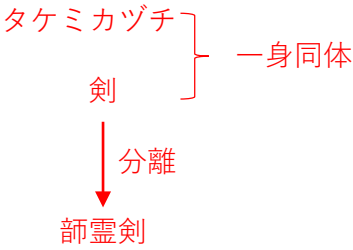
中国思想との接点そして
日本思想の起点

この神武東征神話における劔靈劔の伝承から直ちに連想されるのが、古代朝鮮における金庾信の劔の伝説である。話としては

非常によく似ている。劔靈の霊威の根拠を天上に求める、同種の思想が含まれていることは明らかである。

古代中国の刀剣思想では、天命の思想から神聖視された星を直接彫りこむことによって劔は神聖なものとされた。これを古代朝鮮においては、金庾信の伝説に顕著なように、星の光芒が天上から劔に降りてくることによって劔は神聖なものとして観念されていた。これが神武東征神話においては、神聖なる劔自体が神々の世界である天上から降りてきて、地上でマジカルな力を発揮する。

古代中国から朝鮮、そして日本へと流れ



高天原（神々の世界）

国譲り神話

神武東征神話

神
人

葦原中国（人間界）

神話時代

歴史時代

る大きな思想的系譜があり、この神武東征神話における劔靈劔の伝承は、古代における中国大陸と日本の思想的な接点であるといっている。

そしてもう一つ、この神話には重要なポイントがある。

日本神話を俯瞰してみると、神話に時間軸があるとすれば、天地創世の神話から神々の事跡を語る神代を経て人の歴史を語る人代へと流れていく過程で、天と地の精神的な距離が広がっていく傾向があるように思う。つまり神代の最初は、天上と地上、神々と人間の区別があまり明確ではなく、神も天上と地上を行き来する。しかし、神話時代から歴史時代に向かってこの区別が徐々に明確になっていくようである。このことは、神代中期に位置する国譲り神話において、タケミカヅチが自ら天上界から下界に降りて行ったのに対して、神代と人代のちょうど境目にあたる神武東征神話においては、自らは降りて行かなかったことに顕著に窺われる。タケミカヅチは労を惜しんで天上界に居残ったのではなく、既にこの時期の神話世界においては神も天上から

天地を繋ぐ劔

地上へと降りて行けないぐらいその区別が明確になっていったことである。しかし、劔靈劔というこの劔だけは降りて来られる。神でさえ行き来が不可能はほど明確な境界があるにもかかわらず、天地を繋ぐことができるということがこの劔の神聖性の最たる点である。この思想構造は、後の日本劔思想の基礎となるものである。

劔が天から地上に降りてくるなどという現実離れた話であるが、これが古代日本人の精神世界を忠実に表現したものであることは確かであり、この荒唐無稽さが日本劔思想の一つの特徴でもある。また、劔の神が神話で活躍し、これが思想的に大きな影響力をもつなど、とても合理的あるいは具体的ななどといったことから程遠い、抽象的な象徴性もまた特徴である。日本人は、古今こういった曖昧性を非常に好むようである。

広く東アジアにおける劔思想の流れを踏襲しつつ、既に日本的な独自性をも持ち合わせ、その後の日本劔思想において最も基盤となる思想構造を作り上げていると

ころに、この神話における劔靈劔の伝承の重要性がある。
その意味で、神武東征神話にみられる劔思想は、中国思想との接点であり、そして日本思想の起点でもあるといえる。

〈註〉

- (1) 『日本書紀』では大己貴となつてゐる。
- (2) そのため文中、カムヤマトイハレビコのことを「天つ神の御子」というように記している。

(3) 『古事記』や『日本書紀』に記される記紀神話においては、「劔」「御劔」「刀」「大刀」「横刀」などの語がみられるが、古代日本において「たち」といった場合、これは「刀」「片刀」「劔」「両刀」の総合名称であった。

従つて、この記述の「横刀」あるいは「刀」も総合名称としての刀劔を意味し、さらに『日本書紀』における神武東征神話の件ではすべて「劔」と記されていることから、これは刀劔のうちの劔（両刀）と解してよい。

注意